

### Ⅲ 対談

## 際限のない営みのなかで

清水 弟 vs 野添 憲治



現在の花岡川

### 蜂起した中国人たちの行方

清水 野添さんは「花岡事件の人たち」(評論社刊)の中で、国民学校五年の時、住んでいた藤琴村(現藤里町)で捕えた二人の中国人をさらしものにしたのを見に行ったりと書いていますが、あそこまで逃げたということは、蜂起した中国人はかなり遠くまで逃げていたということになりますね。

野添 そうですね。いま考えると、空腹で、しかもまったく地理的に不案内なのに、よくそこまで行ったと思われるほど遠くまで逃げていますね。

清水 同じ本の中で、秋田県立図書館の成田洋さんが、捕まって護送される中国人を東能代駅で見たと話もでていますね。

野添 あれは岩館の方に逃げて行った人たちなんです。実際、海の方まで逃げてきた人たちは、わりにはいたんですね。海に出て、船を見つけて中国に帰りたいと思っていた人がかなりいたので、海のある方へと逃げたんでしょうね。

清水 八百人のうち、主力部隊は比較的近くの獅子ヶ森や花岡周辺で捕まっているわけだけれども、日本海の方へ二十人なり三十人なりで逃げてきた人のことは、まだあまり詳しく探られていないようですが。

野添 あまり伝えられていません。私が実際に足を運んで調べた北秋田郡田代町山田では、逃げてきた二人が捕えられて殺されているんです。実際にそういう例は、もっともっとあったと思いますね。花輪なんかへもかなり逃げて行ってますからね。

清水 ええ。花輪とか十和田湖の方へ行っただけの話はこれまでも本などに報告があります。

野添 花岡鉱山から日本海側に逃げるのは不可能のように思われるけど、山の尾根づたいに歩くと、岩館の方へはわりとたやすく来られるんですよ。いまの国道が完通する以前には、ちょうどいまの峰浜から藤里町の奥へ出て、さらに藤里から鷹巣方面へ出るという山の道がちゃんとあったんですよ。それは主に尾根づたいについている道でね、私は前に一度歩いたことがあるんですけど、いまはほとんどその跡はないですよ。でも、ああいう道を歩くと、国道筋に歩くよりも短時間で出られるんです。昔は、ハタハタとか塩なんかはそういう道路を利用して運ばれたわけです。清水 しかし、短時間といってもかなりの距離でしょう。

野添 それはどう急いでも、十五時間くらいはたっぷりかかりますよ。

清水 そういうところを空腹の人たちがかなりの人数の大部隊で、整然と山越えしてくるといっわけにはいかなかったでしょうね。

野添 そうでしょうね。バラバラになった人たちが二人、三人と組になっていろんな方角へ散ったということでしょうね。だから、蜂起の後にすぐ獅子ヶ森にたてこもった人たちは大人数だけれども、他にも各方面へかなりバラバラに散って、たとえば日景温泉や青森県側なんかへも行っ

てるし、岩館の方へも、五城目の方へも行ってる。そして、当時私がいた藤琴の方へもきたわけです。夜中のことでしたから、逃げて行く方向をつかめなかったのでしょうね。

### 問題意識の発端と成長

清水 大館市役所にいる佐藤博信さんは、当時、花岡の共楽館の前で目撃した印象が非常に強く残っていて、人間性を根底からひっくり返されたみたいなき感じだったと言っていました。野添さんも、自分の目で見たというか、体験を持っていらっしゃる。それは非常に強烈なんじゃないですか。

野添 そうですね。印象が強烈だといっても、強烈になっていくのは後になってからなんですけれどもね。というのは、私の場合は太平洋戦争が始まった時に国民学校の一年生になったのでしよう。ですから、花岡事件が起きた時は五年生でした。しかし、子どもながら五年間も軍事教育を受けていると、ちゃんと軍人の予備軍員に育っていたんですね。村の中で中国人が捕えられて虐待されたことにも、全然批判的ではなかったし、むしろ、中国人の罫りを「チャンネル」と大声で叫んで歩いたことにしても、私自身としては積極的に参加したんですね。そういう自分の姿を、後になって考えると、非常に恐いわけです。だから、自分も花岡事件に加害者として参加していたんだという自覚が、後になってからうまれてくるのだが、この体験がなかったとすれば、私の

花岡事件への取り組み方にも、若干ニュアンスは違っていたかもしれないという気はしますね。

清水 僕らみたいに戦後に生まれて、そういう原体験というようなものが全然ないのは、非常に弱いと思うんですよ。

野添 いや、私はそう思いませんね。私自身はそういう体験を持っていて、その体験がまた私自身の内でのいうふうな問題になっていったのかというと、いわゆる農民の戦争責任の問題、もっと大きく言えば民衆の戦争責任とは何かという問題とつながっているわけです。たとえば岩波新書の「農民兵士の手紙」という本ですけど、あのような編集の仕方それ自体に問題はあったと思うのだが、ああした形で戦争責任の問題を深く掘り下げていくことには私も同感なんです。ただ方法的に私なんか考えていたものは、かなり違っていたわけです。そこから民衆の戦争責任の問題を自分のテーマとしてやってみようと思ったんですが、ちょうどそのころに別の調査で花岡鉱山に行き、花岡事件があったという問題にぶつかってわけです。それまでは私なんか、全然、花岡事件なんて知らなかったんですよ。現場があれだけ近く、しかも中国人が捕えられているのね。それからいろんな本を読んだり、資料を集めて調べたりしているうちに、国民学校の時に罵倒した中国人たちが、実は花岡事件の人たちだったとわかったわけですよ。

清水 その時の戦慄というかショックというのは、どんなふうでしたか。

野添 うーん。それまでは花岡事件があったのを知って調べていても、心のどこかに、これは私自身とは直接に関係のないよその問題というか、これは他人の問題だと思っていましたからね。

それがそうではなく、自分自身の問題になってきたわけだから、大変ショックでした。私自身でさえこんな具合でしたから、花岡事件そのものは戦後三十年になるとは言っても、現実には県民にはほとんど知られていないと言ってもいいのじゃないでしょうか。

清水 そう言えると思いますね。

### 戦後派の立場から

野添 敗戦前から秋田女子医専にいた高橋実さんというお医者さんの場合にしても、花岡鉱山でチフスが発生したということで、彼は県から要請されて敗戦直後に行き、花岡事件を知ったわけです。高橋さんは一番最初に花岡事件の中国人たちのことを雑誌に書いた人ですね。しかも、あれくらい問題意識のある人で、実際秋田にいた人でも、花岡鉱山で中国人たちの蜂起があったということについては全く知らなかったわけですからね。新聞にはもちろん出なかったし、直接に関係のあった人たちというのは、これは書きもしないし、喋りもしなかったからね。県内にも広がらなかったんですね。

清水 僕は、くだいようですが、戦争体験そのものが全然ないわけです。これは笑話みたいなものですが、小学生のころ、キンピラゴボウが嫌いだと言ったら、おやじが「天皇陛下が食べると言っても食べないか」って詰問したことが一度あったわけですよ(笑)。おかしなことを言うなあ

と思ったですよ、僕は。しかし、おやじの明治三十六年生まれという世代にしてみれば、天皇陛下の命令とあれば嫌いなキンピラゴボウといえども、これは絶対食べなきゃいかんわけですね。その時たった一度きりなんだけれども、あれが僕にとっては一種の戦争体験みたいなものだったんじゃないかというような気はするんですね。

野添 それが後になってから、日本人の戦争責任という問題が自分の内部から生まれてくるというのは……。

清水 あとで本を読むわけです。戦争責任の問題を考えさせたというのは、高校時代に読んだ「きけわだつみのこえ」が最初ですよ。それと一緒に出た「遙かなる山河に」という東大生たちの手記もあります。たとえば、「きけわだつみのこえ」のなかに学生の一人が、ドイツの学生たちは幸福だったと書いているんです。ドイツの学生たちは戦争に行きながらも少なくとも人間的なことを考える余地があった、とね。その学生が読んでいた「ドイツ戦没学生の手紙」という本、これは第一次大戦中に編集されて、岩波新書の赤版で出ていたんですが、それを古本屋で見つけて読んでみた。いろんな形で戦争への恨みつらみとか祖国への愛国心とか遺された家族への、自分の死を無駄にしないでくれみたいな平和への祈りを書きながら死んでいるんです。それから二十年後の太平洋戦争。そこでもやはり日本の学生たちは、戦争への恨みつらみを遺して死んでいくわけですね。それから、カッパブックスで出した中国における日本人の戦争犯罪を扱った「三光」がありますね。白状すると「三光」は僕は読めなかったんです。書いてあることが恐ろしくて。

野添 そうでしょね。それが本当の読み方なんじゃないですか。まともに読み進められる本じゃないですよ。

清水 最近のベトナム戦争でも、岩波新書の「南ベトナム帰還兵の証言」を読むと、帰還兵たちがベトナムでどういうことをやったかを集会で告白しているのがどっさり出ている。第一次大戦、第二次大戦、ベトナム戦争をそういう証言から探ると、体験者たちの告白が度ぎつくなってきたいるんですね。それはつまり、度ぎつい告白をせざるを得ないような状況に追い込まれてきているということじゃないか。平和に向って歩んだということじゃなくて、平和への脅威がそれだけ増えたということだろうと思うんです。なるほど表面はしごく平和に見えますが、底流というか、一歩中に入るとどろどろと一触即発の危険がよんでいるような気がするんですね。

野添 そのあなたが花岡を取材して、戦争をどう感じたんですか。

清水 結論として、戦争を知らない自分には花岡はわからなかった、理解できなかったということです。ある程度、取材して、当時の体験者に話も聞きましたが、なぜ、そんな状況が起り得たのかということが一向にわからないです。

野添 いや、それは私の場合でも同じです。清水さんとは若干意味が違うかもしれませんが、しかし、だからこそ、私はこれまでこの問題にいろいろ聞いてきたのだし、これからもいろいろ聞いていこうと思っっているんですよ。

### 際限のない営みのなかで

野添 結局は原体験のない戦後派の自分にはわからなかったという結論を、清水さんが自分自身に出したにしても、花岡事件に取り組む前と取り組んだ後では、やはりどこか戦争や花岡事件に対する感じ方のニュアンスは違うでしょう。それは二言や三言でもって、ここがこう違うというふうにははっきり言えるというものじゃないだろうけど。

清水 うーん。結局、無知の知みたくないもので、戦争はわからないということがよくわかったのかもしれない。飢餓状態の経験もないし、戦争というものも頭の中でわかった気がしているだけ。そんな状態では危険なんだということは感じましたね。「平和とは戦争を起こそうというよこしまなものを、人間が血と汗といのちを賭けておさえているあいだのことを言う」と読んでくるとがありましたが、わかるような気がするんです。日本人にはまた同じことをやらなはいとは限らないというところがある。それを誰かが「危いぞ、危いぞ」とたえず言いつづけて、自分でも戦争体験を追体験していかないと何にもならない。

野添 清水さんが純粹戦後派で戦争体験がないため、体験のある人とは戦争についてのニュアンスは違うかもしれないけれども、私は本質的にはそんなに違わないんじゃないかという気がしますね。花岡事件についても、私には人間の怖しさということだけがまざまざと感じられるんで

すよ。もっと深めていくと、花岡鉦山の関係者が中国人を虐待しただけじゃなくて、私だってもしあの時代をあゝの立場の中で生きていたら、同じような仕打ちを中国人に対してしたんじゃないかということなんです。だから、再びあの様な事件がこの土地で起きないように、起こさないようにするためには、やはりあの事件は、私たちの親たちがやったことなだけども、それをそのまま親たちの責任ということと処理していかうとしないで、親たちの問題は同時に私たちの問題でもあるのだし、また、私たちもあの様な状況下におかれていれば、現状のままでは同じことを私自身がやりかねない、やらないという保障はどこにもないわけです。だから自分は恐いんだ、人間というのは恐いものなんだというように、牛が食べ物を自分の内臓でハミ返していくように、たえず自分の内部で考えつづけていくことが大切だと思うんです。これはあまり論理的でないので、弱いということはわかるのだけれども、このことが基本にないとダメなんじゃないかという考え方を、私はいつもしているんです。

清水 ええ。よくわかります。

野添 ですから、私なんかも日常会話の中では、自分のことは自分が一番よく知っているよ、という言い方をするんだけど、それは間違いであって、本当は人間というのは自分のことが自分で一番わからないんじゃないかと思うんです。ということは、いまは生真面目に生きている自分にしたって、少し状況が変わると何を仕出かすかわからないという恐怖感があるんです。ですから私は、そういうところをこれから自分のやっていく仕事の原点にしていきたいと思っています

わけです。そういう考えは、花岡事件に取り組んでからとくに強くなりましたね。

清水 戦後派は、戦争を直接体験として知らないというマイナスはあっても、逆に居直るといって、戦争を知らないんだけれども、戦争や戦争責任を考えていけると思います。どうしたって、体験がないものは体験がないんで、そういう際限のない営みのなかで問いつづけていかなくちゃならない。また、体験のある人たちも、ある意味では、その体験があるということによって、これもまた際限のない営みのなかで、あの体験とは一体何であったのかということを考えていかなくてはならない。そういう点は双方に共通していますね。

野添 そうだと思えますね。

### 民衆の戦争責任をめぐって

清水 ところで、さっきの民衆の戦争責任というか、農民兵士たちが中国大陸では何から何まで残虐の限りをつくしていたというあたりをどう見るのかということなんですけれども、民衆に戦争責任があるというふうにしてしまうのはどうも納得できません……。

野添 形式的に言うと、戦争というのはその時代が起こしているという本質を持っていると思うんです。太平洋戦争にしても最近はいろんな資料が出てきて、どんどん新しい事実がわかってきていますね。でも、民衆の戦争責任ということは私にとってはきわめて現実的な問題なんです。

私が生まれて育った藤琴村なんかでも、沢山の人たちが兵隊に行っているわけですね。中学生のころの近所の寄り合いでもそうでしたし、営林署に働きに行っていた時に一緒に働いていた人たちというのは、酒を飲むと戦争へ行った時の自慢話をとくとくとするわけですよ。人を殺した時の話とか、婦女暴行の話とかを、得意顔になって語るんですね。私はそれを聞いていて、「農民兵士の手紙」では家族のことをあれこれと書いて心配している手紙を家に送っている一方では、中国大陸では非人間的な行動をとり、それで戦地から自分の家庭に帰ると、もう何でもない顔をしていい父さんになり、いいパパになるんだということが不思議でした。しかし、後になってみると、やはりそれは、個人的にどうだっていうんじゃないかと、人間というのはもともとそういうものなんだと思うんです。そして、そこから思考の営みを始めるべきだと思うんです。人間というのは状況によって変わっていくものだし、状況に支配される面が非常に強いわけです。逆に言えば、そういう状況を計画的に権力者なり支配者が作り出していけば、まんまと私たちはそれに乗っかっていきやすいということでしょうね。そういう意味ではどうでした？ 花岡へ行って、一般の人たちに会って取材してみて？

**清水** その前に、今の「人間とはそういうものだ」という点はよくわかります。しかし、だからといって戦争の責任を一人一人の民衆に押しつける、いわば一人一人の「人間性の限界」に責任を負わせることはできないはずだと思いますよ。戦争を起こす状況に入るまで、何ら手を打てなかった国民一人一人に責任があるというのは、例の一億総懺悔と同じではないですか。野添さんは

もちろん、民衆の一人として自省していらっしゃる、それはわかりますが、それが自省でおわっているだけでは何にもならない。その自省に支えられた反戦の声なり運動なりを社会化していくことが大事だと思うんです。

**野添** そうですよ。それが一人だけの自省で終わっていたのでは、ダメだと思います。でも、個人の自省の深さが足りなかったり、自省の練り方が浅かったりすると、反戦の声や運動を社会的な広がりを持ったものにしていく時には、やはり問題になると思うんです。日本の戦後の平和運動や反戦の叫びといったものが、かなり線香花火的な面を持っている原因の一つは、このあたりにあると私は思っているだけに、そのことを大切にしたいわけです。

**清水** あまり関心はないんですが、戦後三十年の今年十月三十一日に天皇と日本人記者の会見が行われましたね。あの中で、原爆投下のことにふれて天皇は「原子爆弾が投下されたことに対しては遺憾には思っています、こういう戦争中であることですから、どうも広島市民に対しては気の毒であるが、やむを得ないことと私は思っています」と言った。この発言の中には、自省も何もない。民衆が自省したって、実際、みんながそれなりに反省したと思うんですよ、心の中では。しかし、当局とか政府関係者はなあんにも変わっていない。僕は、それこそが問題だと思うんです。

**野添** それはそうですね。天皇とか支配者の頭の中もからだも、戦時中も戦後も何も変わっていませんよ。変わっているのは、世の中の動きに対応して生きのびていくポーズだけです。戦争

を起こして俺は間違ったことをしたとは、どの支配者も思っていないでしょう。花岡事件に直接の関係がある鹿島建設にしたってそうですすから、自省などするわけがないでしょう。だから、民衆だけが自省したってバカをみるという論法になると思うけど、そうではないんで、自省する力を持つているのは民衆なんですよ。ちょっと短絡した言い方になるけど、その力が歴史を変えてきたのだし、変えていくのだと思いますね。

### 罪の意識の問題点

**清水** 僕は実を言うと、取材を拒否した人たちの方が、魅力的という用語と語弊がありますけど、本当はそういう人たちの話が聞きたかったんです。取材に応じてよく喋った人たちのタイプとしては、要するに、自分は関係なかったんだと。周りの人たちはああいうことをやったけれども、自分はまだ見ていただけなんだ、だから喋っても大丈夫なんだという感じですね。たとえば、三浦太一郎氏なんかはそうですね。ところが、拒否した人というのは拒否しなければならなかった理由があるんで、本当はそこらへんを聞きたかったんだけど聞けなかったということです。

**野添** なるほどね。事件の直接関係者以外の反応というのはどう感じました？ たとえば、一般の花岡の住民の場合ですね。

**清水** 花岡事件の話を書きたいんだけど、というふうな話を切り出すと、やはり何となく表情が変わりますね。たとえば、床屋のおじさんに話を聞いたんです。聞き終わって帰る時に僕がひょいとふり向いたら、彼は小走りに派出所の方に走って行くわけです。僕は確かめたわけじゃないけれども、何かやはり、「朝日」のやつがこういうことを取材にきていると連絡に行ったんじゃないかという気がするわけです。これはあの町がもっている雰囲気かもしれないし、こっちの偏見かもしれないんですが、何かあそこには花岡事件については共通の罪の意識みたいなものがあるって、それをみんなで、黙っていればわからんからということと口をつぐんでジーンと息を殺して時が経つのを待っているような、そういう状態が何十年か続けば忘れ去られるんだというコンセンサスみたいなものがあるように思うんですけどね。でも、それは言ってみれば非常に純情な話でしょう？

**野添** 花岡へ行くと、一般に罪の意識をもっていない人たちはよく喋りますね。

**清水** そういう感じがします。

**野添** それから、確かに自分も悪いことをしたという罪の意識にとらわれている人というのは、聞き込んでいくと、ある程度まで喋ってもやがて口をぐもぐもさせて、もうはっきりモノが言えないという場合が多い。これは逆に言うと、私はやはり一人一人がそうなるべきだと思うんです。それともう一つは別だけれども、私も花岡にはかなり顔見知りになっているんですが、私が行って二時間もすると派出所にやはり通報がいくんだそうです。いつかもテレビの仕事で行ったら、一時間ぐらい経つと、NHKの車が花岡事件のことで町に入っているという通報が、ちゃんと警



察に行くんだそうですね。これはまた非常に短時間で広く伝わるんです。さっき清水さんも言ったけれども、やっぱりもう一つの喋らないタイプのなかには、あの事件については警察・特高の規制がかなりあったわけですから、それを今でも怖れているというタイプがありますね。

清水 ええ。確かにそれもあります。

野添 あのことを喋るとまた警察がくるんじゃないかと、いまでも一種の怖れをもっているわけです。喋っても名前は出さないで下さい、黙っていてくれますか、という具合ですね。これは割合に多いんですよ。それが必ず話の前後に出てくる。普通の人であれば名前は絶対に出さないからと言うと、今度は喋り出すんです。そしてこれは、考えてみれば実は警察へ通報するということの裏返しなんです。これを深く探っていくと、どうもこれは花岡事件を生んだ根につながっているんじゃないかというような気がするんですがね。

### 被害者の努力と加害者の忘却

清水 今回の取材について、僕は「三十年の壁」という題を付けた時に、その言葉のもつ様々な意味の実感があつて、それを現地のルポを通じて出したかったし、それはある程度は出たと思うんですけども、まだまだ取材時間も力も足りなかった。ただ、もつと地元で花岡事件発掘に力を入れるべきじゃないかと思うんです。たとえば、学校で子どもたちに花岡事件についての

作文を書かせていることは、運動としてもっと評価されてよかったですんじゃないですか。

野添 そうですね。あのことは日教組の集会などではかなり高く評価されたんです。

清水 しかし、それがごく一部の集団とか研究者仲間のあいだで評価されていても、実際にあの地域で広く評価されるということではないわけでしょう。

野添 そうね。そういう意味では、大館の桂高校なんかでは生徒会が文化祭などでいろいろやってきているんですけども、やるたびにかなり抵抗があつたようですね。もちろん、周囲から出てきた時に、大人の人たちがそれを汲みとっていこうとあまり力にならなかったし、過去の間に違いに学ばなかったというのは、かなり考えるべき問題を含んでいますね。

清水 やはりそういうことは、きちんとやっていかなければいけないのですか。たとえば、新聞で、堂屋敷鉱山が閉山になった時に、堂屋敷鉱山というのは中国人虐殺の舞台になったと記事に書いてあるんですよ。ところが全然違うわけですよ。しかし、そう書いてもおかしくないほど、全く知られていなかったということだと思えます。そのくせ知っている人たちは本当によく知っているんですね。花岡、と言うと、あつという顔をする。

野添 直接関係者でなくてもそういう人はいますね。花岡事件というのはある人々に言わせると、本になり過ぎていて、活字になり過ぎていていうんですが、それでいながら、おっしゃるように逆にそれほど広まっていけないというのは何ですかね。

清水 やはり広げないでおきたいという願望があるんじゃないですか。本だって、ベストセラーになるなんてことはまずあり得ない。劉さんにしても李さんにしても、秋田県では花岡事件はほとんど知られていないと言くと、それはそうだろうと言わうわけですよ。

野添 ええ、ええ。

清水 でも、劉さんたちは、自分たちがあれほどの体験を受けていながら、それをほとんど誰も知らない、とくに地元ではそれを忘れようという動きさえあるというのは、ショックなんじゃないかなあ。だから、所長であった河野正敏氏が鹿島建設の重役をやっているというのを北海道へ一緒に行った時に劉さんが言っていました、それを聞いて野添さんも大分驚いていましたけれども、彼らは事件の関係者が、いまだどこで何をしているのかということをも丹念に調べて知っているわけですよ。補導員の誰だかが死んだなんていうことも、ちゃんと知っていましたね。

野添 ええ。実にちゃんと知っていましたね。

清水 被害者の劉さんたちが、花岡の罪を問わないにしても、ちゃんと知るべきことは知っている。それに較べると加害者である日本人というのは、全くきれいさっぱり忘れてしまいたいみたいで、これは一体どうなっているんでしょうね。

### 戦後三十年史の無知と風化

野添 こういう言い方はちょっときついにしても、秋田県で太平洋戦争中に戦争という表現をしてもいいようなものがあつたのは非常に少ないんです。土崎の大空襲と、あとは一日市なんかで空から機銃掃射を何回か受けているわけけれども、他には釜石の艦砲射撃の音がこちらまで聞こえたといったような程度で、戦争の本質的な悪が人間を毒したというようなことは、やはり現場を秋田県に限ると、朝鮮人と中国人の強制連行に見るほかないんです。それなのにわずか三十年にして、なし崩しに風化させてしまうというこの民衆の無知さ、怖しさというのが、さきほど清水さんがおっしゃったことなんでしょうね。

清水 民衆が無知だというよりも、民衆を無知にしていたというか、民衆を無知にさせておきたい権力なり何なりがあるわけでしょう。

野添 ええ、ええ。

清水 それを押しつぶしていくというところで、意外と現場で一緒に働いていた民衆というのはよく憶えていると思うんです。それは、喋ったら警察にしょっぱかれるんじゃないかというような心配で語らないだけでね。このあいだ、秋田県にも朝鮮総連の「朝鮮人強制連行」の調査団が入ったわけでしょう。それでちょっと思い出したことなんです、例のカドミ汚染の地域であるという増田町の吉乃鉾山に一度取材に行ったことがあるんです。

野添 吉乃鉾山ね。

清水 何か凄いとこでしたね。そこへ行って、たまたまテーラーを運転している人に話を聞いて

たんですが、いろいろ話しているうちに、ふっとその人が言うには、鉦さいダムを造る時にそこを掘ったら相当の人骨が出てきたっていうんです。それが戦時中に強制連行して働かせた朝鮮人の死体じゃないかっていうんですがね。でも、それは多分まだ十年か十五年前ぐらいの話なんで、その村では大問題になったとしても、警察には届けられていないだろうし、届けられていたにしても表面化しなかったのかもしれないですね。だから、そんなことは秋田県内に二百幾つある廃坑のなかには、ほとんどあったんじゃないかとさえ思えてくるんですよ。もう語る人もいなくなってしまうたんだろけれども、意外とその現場で同じような労働をさせられていた地元の人たちというのは、それを見て知っているとしますね。ただ、喋る機会がないというだけじゃありませんか。

野添 いや。それもあるでしょうけど、下層労働者というのは、逆に言えば日本人だって同じような扱いを受けたわけですから、とくに戦前の話になると、県北の鉦山地帯にはそんな話はいくらところにあるんですよ。だけど、民衆を無知にさせる、言わせないような雰囲気をつくりつつっていくということは、権力がいつでもやることなんでね。

清水 そうですね。

野添 だから私は、戦争責任について言えば、そういう権力に無知にされたままでいるということとそれ自身が、「民衆の戦争責任」なんだという考え方をしているんです。

清水 なるほど、それはそうですね。そこまで要求するのは少し酷だとも思いますが、逆に、それほど厳しい責任が民衆にあるなら、それを誤った方向に指導した政府の責任はもっともっともしくなるはずだとも言えますよね。少なくともA級戦犯は全員死刑になるはずだった。ところがそれはなかった。だから民衆も安心し、戦争責任は感じていない、こういう面もあるんじゃないですか。

### III 対談・際限のない営みのなかで

野添 そういう点も確かにあるだろうけど、私はそうばかりとは思いませんね。日本人の戦犯が外国間の取引きの材料にされて、正当な裁かれ方をしなかったのは問題があるとしても、そのことと民衆の戦争責任の問題とは、別にして考えるべきじゃないでしょうか。清水さんはさきほど、日本人の一億総懺悔にふれていたが、太平洋戦争に関して言えば、一億総責任回避だと私は思っていますね。花岡事件に関してだって、全く同じですよ。あれほど関係者がいながら、自分は悪いことをしたと言っている人が誰一人としていないじゃないですか。さきほどの「朝鮮人強制連行」の調査団には私も一日だけだったが参加したんです。やはり、実際に関係した人で、その時の自分の行為や行動を心に刻んで自省している人はいると思うんですよ。でも、その自省がそのままになっているのであれば、これはやがて消えてしまうんですね。そういう人であればあるほど、子どもにも語らないし、酒を飲んでも語らない。そうしているうちに、歴史は語らなくなってしまうわけです。そういうのを語らせてみたり、記録に残したりしていくというのは、非常にこれははつらくて、そして地味で消極的な仕事に見えるかもしれないけれども、やはりこれは秋田の現状に生活している私たちの責任だと思うんです。今までそういう形では、私たちの先輩たちは、

後に生きる人たちの財産としては何も残してくれなかったですからね。

### 残っていなかった真実の痕跡

**清水** 新聞記者としての反省も含めてみれば、当時の新聞が花岡事件を全然書かなかったということが、僕には決定的でした。

**野添** 全く書いていないですね、一行も。

**清水** 報道管制も厳しかったろうけど、しかし、それは何らかの形で新聞記者が我々の記憶に残すべきはずのものだったと思うんです。そういうことは今でもあるんじゃないかという気がしてくるんです。

**野添** やっぱり、事実を事実として伝えておくということがいかに大切なことであるか、ということですよ。

**清水** そして、それはまた非常にむずかしいことでもあると。

**野添** そう。むずかしいことであって、非常に大事なこともあるわけです。花岡事件なんていうのは、当時の新聞には、あれほどの大事件なのに一行もその痕跡が見当らない。

**清水** 残念ながら、本当に一行もないですね。

**野添** それにしても、直接に記事として出せなくても、私はやり方は幾らでもあると思うんです

がね。そういう方法さえ考えなかったのか、あるいはまた、考えても結局実行できなかったのか、それはわからないけれどもね。それと同じようなことがもう一つ、花岡鉱山病院のお医者さんなんですけれども、まあ今でも私は医師というのは物事を科学的に見る人、またそういう訓練を積んでいる人たちだと思ってるんですが、当時、これははっきりしないんだけど、花岡鉱山病院には十人近いお医者さんたちがいたわけでしょう。ところが、その院長は、まあ亡くなっちゃったそうだけれども……。

**清水** 大内さんですね。

**野添** ええ、大内さんです。彼なんかは医師でありながら警察の言いなりになってしまっ、ほとんど死体検査もしないで死亡認定書を書いたりしていますね。戦後になってすぐ花岡ではチフスが発生したわけだけれども、あの病院は地元の鉱山病院でありながら、何一つ手をつけないんですよ。それで結局、女子医専の教授だった高橋実さんが県から依頼されて、わざわざ秋田市から足を運んだわけなんです。医師たちが、積極的な参加でなくともいい、消極的な参加さえもどうしてしなかったのですかね。それは思想的な問題ではなく、人命を救うという職業的な感覚だけでもよかったです。なぜそのことさえもやらなかったのかですね。この問題も非常に大きいと思います。

**清水** 医師のみならず、職業を問わず、みんなして花岡事件を葬り去ろうという、マンモスを追いつめて崖から追い落とすみたいな営みがあったんじゃないですかね。

野添 イヤなことは忘れて生きていこうという生き方も、それは確かに一つの生き方ではありますよ。しかし、敗戦後に口伝わりに民衆のあいだに一つの事件の真実がひそかに広まっていくということ、これはたとえばアメリカや中国の民衆の体質だったならば、私はもっと民衆は伝えたいと思いますね。それをいまもってやっていないというのは、私たち日本人は三十年前も同じ体質と考えを持って生きていますよ。恐いですよ。

### 戦争を知らせない大人たち

清水 ところで、花岡に限らず、戦争の体験を親が子に伝えているというのは、あまりないんじゃないかという気がします……。

野添 ないですね。

清水 でしょう？ 僕なんか個人的には全然ないですよ。まあ父は軍医でしたし、前線には行ってないんですけども。戦後の食料難に父が機関車にぶら下がって買い出しに行ったなんて話も、まともにはほとんど教えられませんでした。おそらく僕だけでなく、僕らの世代というのは父親からではなく、むしろ野坂昭如や五木寛之の小説の中で戦争というものを漠然と知っているだけです。野坂氏が若い世代にもはやされるのは、案外そういう戦争を語り伝えているせいかもしれません。あの時はひどかった、つらかったという命からがらの体験、飢えて死んだ妹の話な

どは、少なくとも、酒の席で話が出る軍隊での手柄話よりずっとこちらの心にせまってきますよね。もう一つ思い出すのは、「戦争もの」といわれる本が多いでしょ。あれだって、本来、父から子へ語り伝えられるべきものが伝えられていないから本になるんですよ。そして本にすると必ず売れる、それはつまり、戦争を知らない世代といわれるものが、実は知らされていないだけで、本当は知りたいと思っているんだ、ということでないでしょうか。少年雑誌に、一見格好よく書かれている戦争グラフィックだって、案外そういう戦争体験の真空状態の上に乗っかっているという気がするんですが、これは少しこじつけですかね。

野添 私はよく思うんだけど、日本人というのは自分が失敗したことや、自分のマイナスの部分人を人に伝えようとしないところを、本質的に持っている人種なんじゃないかな。

清水 ええ、ええ。

野添 たとえば記録を残す作業にしても、自分や自分たちのマイナスの部分というのは記録に残しませんね。それでは何にもなりませんよ。たとえば、明治維新にしても膨大な資料は残っているけれども、そういうマイナスの資料はあまり見当らない。自分の美談だけは事細かに残すけれども、おそらく沢山あったであろうマイナスの部分というのは風化してなくなってしまう。日本人の何千年の歴史の中で、本当に私たちが学ぶべき民衆の体験の部分というのは、野ざらしになったまま、山の中や川の中に棄てられてしまっているんですね。

清水 むしろ、そのマイナスの部分こそ、積極的に伝えていくべきだと思いますね。

野添 ええ。しかし、そういうことは自分の生き方一つふり返ってみても、大変なことなんですね。自分のほぞを噛むようなマイナスの部分に人に語り伝えるということは、大変な勇気が必要とすることなんです。私自身についても、そのことは言えますね。でもやっぱり花岡事件についても、だからこそ、という考えでやっているわけです。事件の直接関係者でなくても、県内外の有識者の中にも、「あいつはいまだに同じことをやっている」と言う人がいますけれども、私は逆にね、そういうものであればこそ何回も何十回も語り伝えられ、書かれ、読まれるべきだと考えているんです。そういう知識人とは、私の考えはかなり違いますね。

### “花岡”と“ナチ”の場合

清水 話は変わりますが、“花岡”とナチの大量虐殺を比較する人がおりますね。ナチの場合、人殺しの技術と言ったらおかしですが、やり方は命令系統がありましてね、そういうところが別だと思っただけで、しかし、末端にあって直接手を下す場合には、どうも僕はその個人個人の判断でもって殺していると考えざるを得ないんです。

野添 それは考えられます。とくに“花岡”の場合はよく調べてみると、これはあの補導員たちが自分の判断で殺したんだと思われる例が非常に多いんです。上層部からの命令で、というのでは必ずしもないんだね。これは特徴的なことです。

清水 そうなんです。無責任体系みたいなものがあって、ある個人個人に無限にその全権を委任するみたいな感じで機能する、そして、それが逆に忘れようという時には、全員の暗黙の了解でもって忘れていこうという感じなんです。これは犯罪する側にプラスに働くわけなんです。F・フォーサイスというジャーナリスト出身の作家が「オデッサ・ファイル」という小説の中で、「ナチの犯罪というのはドイツ国民の犯罪ではない、個人の犯罪である」といっています。もし彼がナチの犯罪を個人の犯罪だと言えらるなら、“花岡”なんていうのはさらにはっきり個人の犯罪だと思いませんか。それは補導員にして、補導員の周りにいた人間にして、そして実際に獅子ヶ森で山狩りをした人間にして、自分の罪を個人的に黙っているというのには仕方のないようなものかもしれないですが、しかし、それをみんなで押し黙って、消すように忘れていこうとするのは卑劣だという気がしますね。

野添 まあ実際、中国人たちは蜂起していろんな方角へ散って行きましたけれども、私が調べた範囲では、たとえば田代町の山田ですね。そこでは二人を地元の青年団が捕えているんです。ところが、二人の中国人の言葉がわからない。そこに、中国の戦線から帰ってきた人がいていろいろ尋問したけれども、ロクに答えない。それで、「チャンコロのくせにけしからん」ということで青年団の人たちがその二人を殴り殺してしまっただけなんです。彼らは中国人の人たちに別に加えられたというのじゃないのに、全然関わりがないというのに、ただ尋問に答えないというのがけしからんというだけで、警察や官憲に積極的に協力して虐待し虐殺するというような、非

常に単純な戦争協力の形をとっている。そして、そういう単純で浅薄な行為というのは、その本人も簡単にやるものだから、もう簡単に忘れてしまうわけです。そういう無自覚な風化の仕方というのは、一番悪いと思うね。だから、ナチの犯罪を描いたクズネチオーフの「バビー・ヤール」という小説を読んでいると、私はやはりあれを読む限りでは、ナチの犯罪は個人の犯罪というワクにおさまらないような大がかりな国家の罪悪というような感じがするんですが、「花岡」については、これは言うまでもなく大きな意味では戦争の罪悪なんだけれども、殺された一人一人の中国人のことを調べていると、これは補導員や、直接に関係した末端にいる個人個人の日本人が殺したんだという場合が非常に多く見受けられるんです。それが問題なんですね。

### 国家がその罪を償わない時は

清水 もう少し考えてみたいことなんですけれども、花岡事件をなぜ語らないのか、という自己の内部のタブーというようなことはどうなんでしょう。結局、自分で言ってしまうえば自分の責任になってしまふということなんでしょうか。

野添 責任という漠然とした概念ではなくて、具体的に災いが自分の身の上起こるんじゃないかという恐怖心や不安感があるんですよ。いまでも。

清水 ああ、なるほど。

野添 取材してみて、一人一人そういう感じがしませんでしたか。非常に恐がっているんです。なぜそうなっているのかというと、戦後三十年になっても民衆の一人一人には自我に対する発芽というものが充分ではないんですね。まだ日本人は、民主主義とか自由とかはさかんに口にするけれども、まだ解放されていないのですよ。いや、解放の戸口にも立っていないという気がしませんね。

清水 基本的人権が獲得されていないことはわかりますが、だから花岡事件を語らないというのはなぜですか。メキシコでは、女中が皿を割っても謝まらないという。すると日本人は、どうして謝まらないのか、と怒るんだそうです。謝まれば許してやる、という発想ですね。すると女中は、皿を手から離れたというところまでは自分がやった。しかし、それを落として割ったのは地球の引力だ、と堂々と言うそうですね。彼女にとって、謝まるということは弁償するということを意味するから、ただ済みませんでした、と言うだけでは済まされません。謝まるということは大変なことになるわけです。花岡事件について黙して喋らないというのは、そういうことと似ているんじゃないですか。花岡事件を喋ってしまったら、自分は床に手をつけて謝罪し、しかもその罪の償いをしなければならぬと。まあ自分の罪を自覚しているということはいいいことなんです。ようけれども、逆に、ただそれだけでは野添さんが何度も言うように、伝えられないんだと思いますね。マイナスがマイナスで終わっていたのでは、何にもならなくなってしまふということでしょうね。

野添　そうですね。これは鶴見俊輔さんが言ったことだけれども、国家が犯した罪であっても、国家がその罪を償わない時は、民衆が自費でね、自分の手弁当でその罪を肩代りして償わなければならぬと言っていたが、これは私も同感なんです。花岡事件についても、私はこれからも手弁当で、くいついていこうと思ってるんですよ。手弁当で……。

清水　いい言葉ですね。それを結論としましょうか。